

## ■ 神奈川県大学図書館

横浜 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 TEL.(045)481-5661(代表)  
平塚 〒259-1293 平塚市土屋 2 9 4 6 TEL.(0463)59-4111(代表)  
<http://www.kanagawa-u.ac.jp/lib/index.html>

## 大学人の大量虐殺

丸山 茂

少し古い話になるが、2001年の世界5月号に掲載されたオックスフォード大学教授リチャード・ゴンブリッジの書いた「大学人の大量虐殺」は、日本の大学人にとっても非常に興味深い。だいいち日本の外部評価制度や国立大学の独立行政法人化のアイデアはイギリスからも知恵を拝借しているという。そのゴンブリッジは、1980～90年代のサッチャー政権の大学改革は大学人の大量虐殺であったと糾弾する。

サッチャー政権の改革は、おおかた次のようであった。ビジネスマンや素人からなる調査研究費の外部査定、大幅な予算カット、専門集団を経済的利権団体ととらえその独立性を剥奪する、これらを通して大学に経済合理性を導入するというものである。その根底にあるものは学問教育の世界における経済主義の徹底であり、すべてのものは価格に表され数量化され測定可能であるとする思想である。

そのことから、クオリティーコントロールと称して学生への「付加価値」が問われ、これを測定するために入学時と卒業時の価値を測りその差をととして大学の評価を決めようとする行為が正当化される。専門性についていえば、学生の指導を客観化可能なものとしてシステム化し、人間的な主観を極力回避する仕組みが作られ、専門性を担う教師との自由な対話が奪われる。

これらが大学教育に実際にどういう結果をもたらしたかという、教育内容の希薄化、あらゆることを評価するための試験の増大、その結果もたらされる研究と教育のための時間の大幅な削減、顧客化する学生と専門性の喪失、本来測ることの

できない付加価値を課すことやシラバスによる教師の行動の制約などなどである。

このような大学の経済主義的見方に対してゴンブリッジは、もう一つの見方を提示する。大学本来の目的は真実（真理）の追究であり、その使命は学問の世界こそが唯一それをにうることができるものなのである。経済主義者は応用科学に重きを置こうとするが、しかしそれは基礎科学を軽視しては不可能なのである。また、教育というのは人間の営みであり、方法においても結果においても人間的であることが求められる。オックスブリッジが成功を取めているのは、学生が個別に教えられているからであって、それは高価な制度であるが価値は高い。いずれにせよ、真理の探究と経済的尺度とは本来相容れないものであり、大学というものは高価に付くものなのである。

ここには、時代状況を見殺しした古くさい大学の理念が語られているに過ぎず、オックスブリッジの凋落を嘆く古典的の大学人の慨嘆を読みさえすればいいのかもしれない。だが、この青臭い大学の原点を忘れ去ることによって失うものは大きい。手間ひまかかる研究と教育をいかに効率化しようとしても、そこに生まれるのは薄められた教育と生半可な真理である。この原点を、制約された状況の中でいかに見失わないでいられるか。ゴンブリッジは、最後にパートランド・ラッセルの息子コンラッドの言葉を引いているのであげておこう。「専門家としての自尊心を失ったもので自らの職を全うできたものは誰もいない」

(法務研究科教授・民法)

## 『日本語助動詞の研究』

北原保雄著 大修館書店  
B815-283

新垣 公弥子

ここに紹介する『日本語助動詞の研究』の著者である北原保雄先生のお名前をネットで検索してみたいと思います。素晴らしい研究業績の数々です。数多くある中から今日は『日本語助動詞の研究』という書を推薦したいと思います。難しそうだと感じた方であっても『問題な日本語』(大修館書店)といえ、書店の店頭で見かけた方も多いのではないかと思います。日常的に使用される日本語を真正面から分析している点が素晴らしいと思います。

「水が飲みたい」「水を飲みたい」という文は、どちらも日本語として文法的に正しいのですが、言葉というものが非常にシビアなものであることは授業の中でも述べたとおりです。二人として同じ人間がいないのと同様に、言葉もまた、もしもまったく同じ用法、同じ意味であれば、どちらか一方が淘汰されることとなります。そのような前提に立てば、おのずから「水が飲みたい」「水を飲みたい」という文は異質の要素を持ち合わせていることが理解できます。

しかし、北原説が提出される以前は、この「水が」「水を」の部分は双方ともに対象語という名称で呼ばれてきました。

お気づきでしょうか。もしも、まったくこれらの例が同じ用法、同じ意味であれば、どちらか一方が淘汰されることとなります。一見なんでもない「水が飲みたい」「水を飲みたい」という文の「水が」も「水を」もどちらも対象語とした点に疑問を感じ、構文的にその疑問を解いて見せたのが本書です。一読の価値があることはいうまでもなく、実に感動いたします。例外の少ない理論ほど理論として完全なるものですし、矛盾をひとつひとつ無くしていくことが論を構築していくことであると私は考えています。

具体的に北原理論を見ていくと、「～が」といえば主格である、という一定のルールがあるのであれば、やはり「～が」とくれば主格であろうというのが北原説です。そこで、北原先生は主格語には二種類あって、客観的主格語と主観的主格語があり、そのうちのいわゆる対象語といわれてきたものは、実は客観的主格語というべきものであることを結論付けています。しかし、その記述は極めて控えめで、従来の専門用語を踏襲しながら、しかし論を展開していくその真摯な研究姿勢には、再度、感動を覚えます。

多くの研究業績を世に輩出しておられる素晴ら

しい研究者でさえも、新たな専門用語(ターム)を用いる場合にはとても慎重であることに気づかされます。

上記の例を構文的に見ると「水を飲む」であり、「水が飲みたい」となります。つまり「飲む」という動詞と呼応する、あるいは「飲む」という動詞が要求するものは「水を」である。そして「～たい」の要求するものは「水が」となります。このように考えれば、「水が飲みたい」の「水が」は客観的主格語ということになります。例外の少ない理論ほど理論として完全なるものですし、矛盾をひとつひとつ無くしていくことが論を構築していくことです。

一冊の研究書を解説するには、その他の関連する書物にも目を通さなくてはなりません。研究書の最後には参考文献が付されていますので、それを一冊ずつ読んでみるのもよいでしょう。点と点であった日本語が線となって浮かび上がってきます。その瞬間こそが知的欲求が満たされる瞬間でもあります。

また、この内容と関連して大野晋先生の『日本語の文法を考える』という著書があります。その中で、「ク活用とシク活用の相違は、形式だけの相違ではなく、含まれる意味に相違がある点を明らかにしたのは、大学二年生の山本俊英さんで、ク活用の形容詞は物の性質や状態を客観的に捉えて表現する。これに対し、シク活用は情意を表す」という件があります。

良質の授業をするためには良質の研究をしていくことが必要であると私も考えます。そこに触発されると、大学生でありながら研究史を揺るがすような発見をする可能性があるというのはとても素晴らしいことです。

難しそう著書であっても、専門の書を手に取り、ぜひ辞書を片手に解説して欲しいと願います。辞書も一般的な辞書ではなく、専門には専門の辞書というものがあります。そういった辞書にも触れて欲しいと思います。例えば日本語に関する辞書であれば『日本文法大辞典』(明治書院)、『国語学大辞典』(東京堂出版)、『国語学研究事典』(明治書院)といったものがあります。

私は「文人」という言葉が大好きです。食べるのに困らない階層の人々で、書物に遊ぶ人のことだそうです。大学生となったからには、ぜひかつての「文人」のように優雅に書物に遊んで欲しいものです。(経営学部助教授・日本語学)

## 『茶色の朝』

フランク・パヴロフ著 藤本一勇訳 ヴィンセント・ギャロ絵  
高橋哲哉メッセージ 大月書店 B953-382

## 本間正明

9月の末、「9条がんばれ！弁護士と市民がつどう『第9』コンサート」という催しに出かけた。ここで、がんばれと応援されている「9条」は京都や札幌の地名ではなく、日本国憲法第9条、すなわち戦争の放棄と戦力不保持を定めた条文のことである。その日は偶然にも、改憲を声高に叫んでいた人物が国会で首班指名を受けた日と重なり、この催しの日にち設定は絶妙のタイミングということになった。この風変わりなコンサートの半ばに池辺晋一郎の即興ピアノ演奏を背景として日色ともゑによる「茶色の朝」の朗読が行われた。それはこの本の最後の数ページのみであったが、心に染み入る朗読だった。

「茶色の朝」の物語は、日常生活に徐々に、ゆっくりと“茶色だけ”が押しつけられ、しかしその一つひとつは取るに足らない、あるいは我慢できる、いや、むしろ「流れに逆らわないでいさえすれば安心が得られて、面倒にまきこまれることもなく、生活も簡単になるかのようだった。茶色に守られた安心、それも悪くない。」とまで考えているうちに、ついには抜き差しならぬ事態に至るという寓話である。全体主義が国民に浸透する過程で、「外側から見ておそろしくドラスティックな打撃の連続であったものは、内側の世界の住人にとっては意外に目立たない、歩一歩の光景の変化として受け取られていた」(注)という状況を巧みに寓話化したものである。

この物語の作者フランク・パヴロフは1940年ブルガリア生まれ、フランス・グルノーブル在住の心理学者かつ子どもの人権の専門家と紹介されている。この日本語版の後半に付けられた哲学者高橋哲哉の解説というにはやや長いメッセージによれば、著者がこの物語を書いたのは、1998年のフランスでの統一地方選挙でルペン率いる極右政党・国民戦線の伸張によって、これと手を結ぼうとす

る保守派がでてきたことについて、抗議と警告を意図したものだだったという。ちなみに、フランスの読者にとって茶色は、ナチス党初期の制服の色だったことから、ナチスを連想させる色なのだそう。著者はこの警告の書が広く、特に若者に受け入れられることを望み、その為に印税を放棄し、わずか1ユーロ（当時の為替レートでは100円を若干上回る程度）の定価で出版した。そして、2002年4月21日の大統領選第1回投票でルペン候補が左派のジョスパン首相を押さえシラク大統領との決戦投票に進んでしまったとき、極右政権阻止の大きなうねりをフランス社会に作り出すことに、この本は少なからず貢献したようである。なぜなら、5月5日の決選投票までの間に著者パヴロフはベストセラー作家の仲間入りをしてしまったのだから。

さて翻って日本の現状は？いや、ここで声高な調子になるのは止めておこう。こんなエスプリに富んだ本を紹介しているところなのだから。日色ともゑが朗読した部分から一節を引用するだけにしておこう。

「いやだと言うべきだったんだ。抵抗すべきだったんだ。でも、どうやって？政府の動きはすばやかだったし、俺には仕事があるし、毎日やらなきゃならないこまごましたことも多い。他の人たちだって、ごたごたはごめんだから、おとなしくしているんじゃないか？」

この本の日本語版には、高橋哲哉によるメッセージの他にヴィンセント・ギャロによる洒落た絵が添えられて、魅力ある絵本に仕上がっている。そう言えば、池辺晋一郎の即興ピアノ演奏はヴィンセント・ギャロの絵の音による表現だったのかな。

(注)丸山眞男「現代における人間と政治」、「増補版・現代政治の思想と行動」(未来社)所収

(工学部教授・数学)

外国語学部国際文化交流学科開設記念

神奈川大学図書館所蔵貴重書にみる

## 『日欧文化交渉史』展を開催

去る10月3日(火)から10月9日(月)まで、イセザキ町の有隣堂本店書籍館地階「有隣堂ギャラリー」において、図書館主催による外国語学部国際文化交流学科開設記念『神奈川大学図書館所蔵貴重書にみる日欧文化交渉史』展を開催しました。

17世紀以降、日欧文化交渉史は日本の歴史を見る重要な視点となっています。展示では、本学図書館が所蔵するモンタヌス「オランダ東インド会社遣日使節紀行」、ケンペル「廻国奇観」、アンペール「幕末日本図絵」等の日本研究を通して、日本と欧米との政治的、社会的、文化的交渉史を、横浜・神奈川の開港期を中心に紹介しました。また、10月8日(日)には、鳥越輝昭外国語学部教授(国際文化交流学科主任)によるフロアレクチャー「見ぬ世の人を描くには—『蝶々夫人』のことなど」が行われ、楽しいお話を伺うことができました。7年前に有隣堂ギャラリーで開催した展示会に比べ、今回は広報活動の不足からか入場者がやや少なく今後の反省点となりましたが、訪れた人は一点一点メモを取るなど熱心に見学をしていました。



オランダ人、アルノルドゥス・モンタヌス Arnoldus Montanus 1625-1683の著書『オランダ東インド会社遣日使節紀行』Gedenkwaardige Gesantschappen der Oost-Indische Maatschapy aan de Kaisaren van Japan は、1669年にオランダ語初版が出版されました。その内容は、織豊時代から徳川時代にかけての約100年間の日本の歴史叙述で、信長、秀吉、家康らの覇権争いを中心に記述されています。しかし、モンタヌスは一度も日本に来たことはありません。彼の歴史叙述は17世紀初葉からの50年間、オランダ東インド会社から日本へのオランダ人使節数名の見聞録、16世紀以来の日本でのキリスト教布教や伝播に従事したポルトガル人、スペイン人イエズス会宣教師の報告書類に依拠していると言われています。そして同年にはドイツ語訳初版が、1670年には英語訳初版、1680年にはフランス語訳初版がそれぞれ出版されています。このように各国語訳版が相次いで出版されたのは、江戸幕府による鎖国令が1639年に貫徹されて以降60年近くの間、日本の情報が入らなくなったため、本書がオランダのみならず

ヨーロッパにおいても日本に関心を持つ人々に歓迎されたからです。本書には、20数枚の見事な銅版画の挿絵が折り込まれています。今回は、英語訳初版から複製したものを額装して展示しました。想像で描かれたこれらの銅版画は、現在の我々から見ると何とも奇妙に映りますが、後の日本研究者に大きな影響を与えることとなります。

ドイツの博物学者で医学者のエンゲルベルト・ケンペル Engelbert Kaempfer 1651-1714もモンタヌスの本書から日本の情報を得た一人です。1690年に





オランダ東インド会社の医官として来日したケンペルは、後に『廻国奇観』（1712年）を著し、彼の死後『日本誌』（1727年）が出版されました。その『日本誌』には、ケンペルの2度にわたる江戸参府で得た知識、彼の直接の見聞に依拠した日本の歴史、地理、政治、貿易、宗教、文学、芸術、言語、博物について紹介と考察がされています。江戸参府で五代将軍綱吉との拝謁にふれている箇所「謁見の広間は、モンタヌスが想像し紹介していたのとはずっと違っていた。ここには高くなった玉座も、そこに登ってゆく階段も、たれ下がっているゴブランの壁掛けもなく、玉座と広間すなわちその建物にもちいてあるという立派な円柱もない」（ケンペル・斎藤信訳『江戸参府旅行日記』平凡社）と述べています。このことから、ケンペルが来日するにあたって、モンタヌスの本書から十分な情報を収集していたことが窺われます。

そして、さらに時代は下って1853年に、ペリー提督指揮下のアメリカ合衆国日本遠征東インド艦隊が来航する前に発行された絵入新聞『グリース

ンズ・ピクトリアル』の第一面を、銅版画の挿絵を新たに木版画に起こした「謁見の場での日本の皇帝」が飾っているのを見ると、ペリーもまたモンタヌスを知っていたことを察することができます。

今回の「日欧文化交渉史展」では、このモンタヌスの本書と、そこから派生した日本研究を中心に、ペリー関係・万延元年の遣米使節関係の資料、ディキンズが翻訳した『万葉集』等の日本の古典、ツェンペリーの『日本植物誌』等の日本研究周辺の資料を紹介しました。この展示で、様々な系譜、様々な著者と著作が互いに影響または連鎖しあって発展してきた日本研究の流れを表現できたとすれば幸いです。

なお今回見逃した方は、2007年2月1日（木）から2月6日（火）まで新宿の紀伊國屋画廊において同展示会を開催しますのでぜひご覧ください。



外国語学部国際文化交流学科開設記念

## 神奈川大学図書館所蔵貴重書にみる『日欧文化交渉史』展

- 日 時：2007年2月1日（木）～2月6日（火）  
午前10時～午後6時30分（最終日は午後6時終了）
- 場 所：紀伊國屋画廊（紀伊國屋書店新宿本店4階）

## チェンバレン『日本事物誌』1890年

Chamberlain, Basil Hall. 1850-1935

Things Japanese: being notes on various subjects connected with Japan / by Basil

Hall Chamberlain. --London: Kegan Paul, Trench, Trübner; Tokyo: Hakubunsha, 1890.

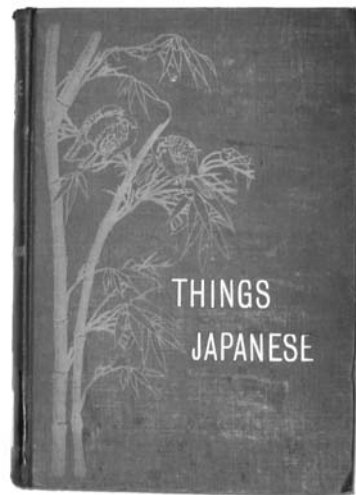
ii, 408p., [1] folded leaf of plate: col. map; 21cm.

Index: p. [391]-408.

Full cloth.

本書の著者チェンバレンは、1850年(嘉永3年)10月18日イギリスの南海岸ポーツマス軍港サウススイーに生まれた。父ウィリアム・チャールス・チェンバレンは英国海軍の中将だった。母エライア・ジェーンの死後、二人の弟とヴェルサイユの祖母のもとで教育を受け、リセ(中学校)に通った。後に二人の弟ハレーは海軍将校になり、フーストンは音楽家ワーグナの娘と結婚し、ゴビノーの『人種の平等について』(1853年)と共にアリア人種=ゲルマン人の優越を鼓舞した『19世紀の基礎』(1899年)を著してナチズムを正当化する道を開いた。生涯病弱だったチェンバレンにとって、その健康的理由で17歳の時にスペインで過ごした一年間は、ヴェルサイユでドイツ人家庭教師から習得したドイツ語に加え、彼の多言語理解・国際的視野をより豊かにする絶好の契機となった。しかし、この病弱ゆえに、彼は志望したオックスフォード大学での勉学を断念せざるを得ず、一時イギリスのベアリング銀行に勤めたが長くは続かなかった。1869年(明治2年)から3年間外遊し、マルタ島、イタリア、スイス、ギリシャ、ドイツを訪れている。来日は1873年(明治6年)5月29日、東京、芝の青竜寺に住居し築地の海軍兵学寮で英語の教師を勤める傍ら、浜松藩士荒木蕃、鈴木庸正に日本の古典研究を学んだ。その成果「枕詞および言い掛け考」(1877年)を1872年(明治5年)創立の日本アジア協会 Asiatic Society of Japan の紀要に発表、さらに『日本古代詩歌』(1890年)他を著して外国人日本研究者としての地位を確固たるものにし、1886年(明治19年)、

森有礼の仲介で帝国大学文科大学(現東京大学文学部)の博言学(言語学)の教授となった。本書『日本事物誌』では、Harakiri(切腹)は日本人ならば誰もが行う日本古来のしきたりではないことなど欧米が抱いた幻想や理解し難い日本に固有する事物が時には日本人、日本の文化を辛辣に捉えながらも解きほぐされている。その論及は、日本人及び日本語、日本文学、欧米人の幕末前後の日本研究文献への寸評、地理、社会制度、宗教、風俗習慣、美術など多岐に亘っている。1890年(明治23年)に初版、1891年(明治24年)に第2版、1898年(明治31年)に第3版が刷られ、1939年(昭和14年)に最終第6版を重ねるほど好評だった。本学図書館では、初版、第2版、第3版を所蔵している。初版の索引項目は、1137件、第2版1577件、第3版1566件で版によって異同がある。来日以来、各地を旅行し(特に箱根を愛し、宮ノ下の富士屋ホテルで一年の大半を過ごした)日本の風物にふれ、その間に形成された彼の<日本観>を十分に本書から知る事ができる。1911年(明治44年)に離日、1935年(昭和10年)2月15日、スイスのジュネーヴにて84歳で没した。



チェンバレン『日本事物誌』初版

湘南ひらつかキャンパス図書室

## 『この経済本がすごい!!』 展開催中

■展示場所：平塚図書室展示コーナー

■展示期間：2006年9月11日(月)～12月25日(月)

『読書週間』－読書の力によって、平和な文化国家を作ろう－という理念を持って始められたこの運動は本年で60回目を迎えました。

本来は文化の日を中心とした2週間が読書週間ですが、この読書運動の節目の年に寄せて、平塚図書室展示コーナーにおいて『この経済本がすごい!!』展を開催しています。

ご存知のとおり平塚図書室では経営学部・理学部の学生が主たる利用対象であり、かねてから「お薦めの本を教えて欲しい」という経営学部の学生の要望がありました。それに応える形で今回の企画展を開催しました。

本展示は、今夏「週刊東洋経済(第6036号)」で60ページをさいた特集『この経済本がすごい!!』が発刊されたことに端を発しています。この特集は、まさに現代のリーダー達の思いが伝わってくるような内容になっています。その一部を紹介しますと、「IT 経営者が語る私のお気に入り3冊」、「『オシムの言葉』を経営書として読む」、「人間を知り、動かすために、経営者が読む本」、「自分の血肉になるまで熟読玩味してこそ読書です」、「時代の大きな流れをしっかりと読み取りたい」、「有名企業27社これがわが社の教科書だ!!」、「2006年上半期経済・経営ベスト100」などまさに学生向けの内容であり、現在、産業界・経済界で活躍中の「81人のリーダーが選んだ必読の300冊」に相応しいものとなっています。

これら紹介・推薦図書のうち現在購入できる図書については、本学図書館に所蔵されていますので、以下にその一部を掲載いたします。ぜひご利用ください。



書名	著者	出版社	請求記号
時代を超える生存の原則 (ビジョナリーカンパニー 1)	ジェームス・C・コリンズ [ほか] 著、 山岡洋一訳	日経BP出版センター	335.253-13
企業変革力	ジョン・P・コッター著、梅津祐良訳	日経BP社	B336-637 336-365
「決定的瞬間」の思考法	ジョセフ・L・バグラッコ著、福嶋俊造訳	東洋経済新報社	336.3-210
リーダーシップ入門	金井寿宏著	日本経済新聞社	B336.3-359 336.3-234
組織マネジメントの プロフェッショナル	高橋俊介著	ダイヤモンド社	336.3-235
ロジカル・シンキング	照屋華子、岡田恵子著	東洋経済新報社	336.4-438
CFOの戦略会計	落合 稔著	中央経済社	B336.84-245 336.84-123
「疑う力」の習慣術	和田秀樹著	PHP研究所	379.7-16
八甲田山死の彷徨	新田次郎著	新潮社	913.6-1093
企業の究極の目的とは何か (ザ・ゴール 1)	エリヤフ・ゴールドラット著 三本木亮訳	ダイヤモンド社	933-303-1

## 図書館展示コーナー

### 『複製 世界の絵本館』 ～オズボーン・コレクション～

展示期間：2006年12月4日  
～2007年3月28日

『オズボーン・コレクション』とは、イギリスの図書館長エドガー・オズボーン氏よりカナダのトロント公共図書館に寄贈された古典絵本の中から、35点を厳選して1979年(国際児童年)に日本のほるぷ出版が複製したものです。

世界中の子どもたちに長年親しまれてきた『赤ずきんちゃん』『シンデレラ』『長ぐつをはいた猫』などは、みなさんも読んで記憶が

あるのではないのでしょうか。この複製版では、本の内容や絵の色調、版型、装丁などが完全に再現されています。当時の印刷技術と絵本作家や挿絵画家の技法から、いかに1冊1冊丁寧に作られていたかを理解することが出来るでしょう。近世の絵本に影響を及ぼした代表的スタイルをぜひご鑑賞ください。



## 湘南ひらつがキャンパス図書室 学年末試験に向け休日開館を実施

学年末試験に向け、平塚キャンパス図書室の休日開館を下記のとおり実施します。

開館日：2007年1月8日(月)(成人の日)  
1月14日(日)  
1月21日(日)

開館時間：9時10分開館～16時50分閉館

なお、当日売店は休業しておりますので、昼食は各自でご用意ください。

## 図書館の利用案内

### 1. 冬季長期貸出について

冬休み長期貸出を次の期間行います。  
貸出期間：12月4日(月)～12月26日(火)  
返却期限：2007年1月15日(月)

### 2. 年末年始の休館・休室について

12月27日(水)～2007年1月7日(日)

### 3. 学年末試験に伴う一般公開の休止について

2007年1月8日(月)～2月2日(金)

## 書架から

ペットブームと言われて久しい。街を歩いていても、犬や猫を連れた人と出会うことが多い。確かにペットは心を癒してくれるし生活に潤いを与えてくれる。だが反面、死別によりペッロス症候群に陥ったり、年老いた動物の介護が話題になったりする。また世話ができなくなって、動物を野に捨てる無責任な行為が問題になっている。ペットも命ある生きものである。人間にとって動物とは一体どういう存在であるのかをもう一度考え直すべきときなのではないだろうか。子供のころ犬を飼っていた。しかし、ご多分に漏れず面倒を見切れなくなって、動物を処分する施設に連れて行ったことがある。犬であっても自身の置かれた立場が分かるのであろう。そのときの悲しそうな目が忘れられない。キャンキャンと鳴く声が、今でも耳の底に残っている。(Y)